

## ピレモンへの手紙「パウロの執り成し」

### 1A ピレモンにある愛と信頼 1-7

1B 家の教会への挨拶 1-3

2B パウロたちにある良い働き 4-7

### 2A 受け入れへの懇願 8-16

1B 獄中で生んだ子 8-11

2B 福音の働きの仲間 12-14

3B 愛する兄弟 15-16

### 3A 従順への確信 17-24

1B 代償の肩代わり 17-22

2B 挨拶 23-24

## 本文

ピレモンへの手紙です。私たちは、テモテへの手紙、テトスへの手紙と、個人に宛てたパウロの手紙を見てきましたが、ここもそうです。ここは、ピレモンという個人に宛てた手紙です。彼は、教会の指導的役割を果たしていましたが、牧会者ではないようです。コロサイにある、数ある家の教会の、家の持ち主でした。

したがって、コロサイ人への手紙のことを思い出さないといけません。その手紙とピレモンへの手紙は、同時に同じ人が持っていったと考えられます。コロサイ 4 章 7-8 節を読みます。「私の様子はすべて、愛する兄弟、忠実な奉仕者、主にある同労のしもべであるティキコが、あなたがたに知らせます。ティキコをあなたがたのもとに遣わすのは、ほかでもなく、あなたがたが私たちの様子を知って、心に励ましを受けるためです。」

パウロは、ローマの獄中にいます。使徒の働き 28 章に、その様子が描かれています。エルサレムへ旅の後、ユダヤ人の騒動の巻き込まれ、ローマの保護下に置かれてカイサリアの幽閉されました。そこから彼は、カイサルに上訴し、それでローマで軟禁状態にあります。自費で家を借りています。けれども、ローマ兵に鎖につながれています。そこで書いた手紙は、エペソ、ピリピ、コロサイ、そしてピレモンです。アジア人であるティキコが、エペソとコロサイ、それからピレモンへの手紙を携えています。

けれども、パウロは続けてこう書いています。コロサイ 4 章 9 節です。「また彼は、あなたがたの仲間の一人で、忠実な、愛する兄弟オネシモと一緒にいきます。この二人がこちらの様子をすべて知らせます。」オネシモが、一緒にいます。一つに、あなたがたの仲間の一人といっています。こ

れは紛れもなく、ピレモン家に奴隷だったということです。そして、忠実な働き人としてパウロはみなしています。そして、「愛する兄弟」です。

このことには、コロサイの人たち、特にピレモン家では大きな衝撃だったでしょう。なぜなら、オネシモは、おそらく金銭や財産を盗んで逃亡していた奴隷だからです。彼がローマに逃亡し、そこで獄中にいるパウロに出会い、彼を通してイエス・キリストを信じて、主のしもべになったのです。悪さをした奴隷がイエス様を信じたということを知ったら、純粋の主をほめたたえることでしょう。けれども、自分の家で悪さをした奴隷ということであれば、話は別です。自分に大きな損失を与え、信頼を著しく損ねた本人です。まるで何事もなかったかのように、彼を迎え入れることは、感情的に、心情的に難しいことです。彼自身の心の整理が必要です。

そこでパウロは、そのための働きかけとしてこの手紙を書いたのです。ピレモン自身も、パウロの宣教の働きで、信仰へと導かれた人です。そこでパウロは、その深い信頼関係の中で、同じく最近、信仰を持ち、深い信頼を寄せているオネシモの間を取り持ったのです。

#### 1A ピレモンにある愛と信頼 1-7

#### 1B 家の教会への挨拶 1-3

<sup>1</sup> キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンと、<sup>2</sup> 姉妹アツピア、私たちの戦友アルキポ、ならびに、あなたの家にある教会へ。<sup>3</sup> 私たちの父なる神と、主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロが、ピレモンとその家の教会の人たちに挨拶をしています。自分自身のことを、「キリスト・イエスの囚人」と言っていますね。これは、他の獄中での手紙と同じく、彼は、キリストの福音のゆえに、今、このローマの獄中に入れられていることを確信していました。そして、ピリピ書で見たように、親衛隊にキリストを信じる者たちが多く現れて、ローマの福音が、その獄中から広がっていました。ゆえに、囚人であることが、主にお仕えすることに用いられているのです。

パウロがなぜ、敢えてピレモンに自分が囚人であることを強調しているのか？それは、オネシモが奴隷だからです。囚人と奴隷はもちろん、異なる立場にいますが、物理的に拘束されて、自由を奪われている人々であることには変わりません。そしてオネシモは、逃亡奴隷ですから、牢屋に収容されて当然の身です。しかし、物理的な制約によって、キリスト者はその自由度が測られるものではないことを、パウロは強調しています。主は時には、自由がないところで、ご自身にある自由を、みこころを行う自由を与えられることが、しばしばあるのです。

私たちが病になって、病になったからこそ、キリストにあるいのちを見つけ、それを伝えることもできます。星野富弘さんが、日本ではその代表的な人ですね。自分が、ある被害を受けて、その被

害の後遺症が残っているかもしれません。しかし、その苦しみがあるからこそ、同じような苦しみを通っている人々に、神の慰めの福音を伝えることができます。戦争の渦中にいる人々、例えばウクライナのキリスト者は、これまで心を開かなかった仲間が福音に心を開き、今までに見なかった、みことばの広がりを見えています。

そしてパウロは、他のいくつかの手紙でもそうであったように、自分だけでなく、兄弟テモテも手紙の送り主として書いています。ピリピ 2 章 20 節に、「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。」とあります。テモテは既に、パウロの福音の働きの腹心になっていました。

そして、「私たちの愛する同労者ピレモン」と言っています。兄弟愛と、同じ福音の働きをしている同労者であることを表しています。私たちも、同じ福音の働きをしている者たちある愛の結びつきは、同じ労苦を通っているだけあって深く、そして強いです。

そして、「姉妹アッピア、私たちの戦友アルキポ」とありますが、注解書などによると、多くが、アッピアがピレモンの妻で、アルキポが二人の息子ではなかったか？という意見です。それはあり得ますね。これから、オネシモのことを話すので、自分たちの家に関わる人の名を挙げていると考えられるからです。ところで、アルキポは、監督など何らかの指導的な役割を担っていたと考えられます。パウロがコロサイ書で、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように。」と言っているからです(4:17)。

そして、恵みと平安があるように、といういつもの挨拶です。恵みがあって平安があります。

## 2B パウロたちにある良い働き 4-7

<sup>4</sup> 私は祈るとき、いつもあなたのことを思い、私の神に感謝しています。

パウロの祈りの生活の豊かさを示しています。いろいろな手紙で、いつも思っては、祈っていると書いています。ピレモンのことは、神への感謝の祈りがあふれてきます。理由が次です。

<sup>5</sup> あなたが主イエスに対して抱いていて、すべての聖徒たちにも向けている、愛と信頼について聞いているからです。

主イエスに対して抱いている、愛と信頼。それから、聖徒たちにも向けている愛と信頼です。双方へ向かっていることが大事ですね。イエス様への愛があり、また信頼しています。その愛と信頼ゆえに、聖徒たちに対しても愛と信頼があります。

ここで大事なのは、「すべての聖徒たち」です。パウロは他の手紙でも強調していますが、一部の聖徒たちではなくすべての聖徒たちなのです。主は、分け隔てなく、ご自分のものとされている者たち、聖別された者たちをすべて愛しておられます。そして、ここピレモン書では、その聖徒たちの中に、自分のものを盗んで逃げたオネシモがいるということです。

<sup>6</sup> 私たちの間でキリストのためになされている良い行いを、すべて知ることによって、あなたの信仰の交わりが生き生きとしたものとなりますように。

「私たちの間でキリストのためになされている良い行い」とは何か？これは、オネシモの回心も含めて、負債を負っている人々に愛を示して、福音を語って、それで救われているということも含みません。こういったことのすべては、ピレモンには伝わっていません。ティキコが来たら、そのすべてを知ることができます。

そして、「あなたの信仰の交わりが生き生きとしたものとなりますように」と言っています。すでに、彼らの間には信仰の交わりがあります。これは、神の恵みによって与えられている信仰を分かち合うことによって、交わりができています。この交わりは、ギリシア語でコイノニアです。神秘的な一体感も含まれます。信仰を分かち合うことで、キリストをそれぞれが分かち合うことができ、キリストを互いに知らせることができます。キリストにある一体を味わえるのです。私たちは、それゆえ教会で、スモール・グループを行っています。与えられたものを分かち合うのです。

そして、その信仰の交わりが、生き生きしたものになりますようにと祈っているのは、まさにオネシモを赦し、彼を受け入れることによってなのだ、ということです。私たちが、キリストの赦しが大事だ、神との和解が大事だと言いながら、もし敵対関係にある身近な人々と和解していなければ、どうなるでしょうか？その和解と言っている貴い教えが、生きていません。イエス様は言われました、「マタ 5:23-24 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。」

<sup>7</sup> 私はあなたの愛によって多くの喜びと慰めを得ました。それは、兄弟よ、あなたによって聖徒たちが安心を得たからです。

ここにパウロの牧会的な心が出ています。ピレモンの愛によって、多くの喜びと慰めを得ていますが、それは自分がその愛と慰めを受けたからではありません。ここでは、「あなたによって聖徒たちが安心を得た」と言っています。自分の愛するピレモンが、主の愛に満たされて、他の聖徒たちが安心を得ているのを知って、多くの喜びと慰めを得ているのです。養い育てている人が、今度は、他の人々に霊的に益になっているのを見ることは、大きな喜びと慰めを得ます。主に対して、

実を結んでいるのを見ているからです。

パウロは、このことをオネシモにもしてほしいというのが、ここでの隠れた思いです。20 節に、「私をキリストにあって安心させてください」と言っていますね。オネシモが受け入れられることによって、自分自身も安心したいのです。

## **2A 受け入れへの懇願 8-16**

このようにして、パウロは、ピレモンのことを慕っていて、愛していることを見ることが出来ました。彼の中に神の恵みが働いています。人を励まし、その人がキリストにある次の愛の行動を勧める時に、大事なものは、励ますことです。すでに働いている神の恵みを思い起こさせるのです。私たちは、主のために働いている時に、忘れてしまいがちです。目の前にある人間的な困難や労苦に目が留まりやすいです。けれども、思い起こせば、主の恵みがこんなにもあります。ピレモンは、もちろん完全ではありませんから、心に悩みや負い目もあったことでしょう。それでも、愛と信頼において、秀でていたのです。そのことを、パウロは認めて、ほめていました。

## **1B 獄中で生んだ子 8-11**

<sup>8</sup> ですから、あなたがなすべきことを、私はキリストにあって、全く遠慮せずに命じることもできるのですが、<sup>9a</sup> むしろ愛のゆえに懇願します。

パウロは使徒です。使徒としての権威が与えられています。ですから、その権限を使って、オネシモをピレモンの家の教会に受け入れなさいと命じることもできます。けれども、愛のゆえに懇願すると言っています。

ここに愛の本質が表れていますね。イエス様が、神の身分であるにもかかわらず、人となり、しもべの姿を取られました。主が命じれば、山でさえ動かすことができます。しかし、主は人々に優しく接しました。そこにある神の憐れみによって、人々が悔い改めることを願われていたからです。愛ゆえに、与えられている力を敢えて行使しないという選択もあります。

<sup>9b</sup> このとおり年老いて、今またキリスト・イエスの囚人となっているパウロが、<sup>10</sup> 獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。

パウロは、自分にある特別な感情をここで言い表しています。年老いています。そして、再びキリスト・イエスの囚人になっています。ピリピなどでも、獄中に入れられていました。また、カイサリアでも、幽閉されていました。獄中にいることのほうが、日常になってしまっている状態です。そんな中で、伝道してオネシモが信じたのです。彼にとっては、老人の子どもが与えられたような思いなのです。アブラハムがイサクを生んだような思いでしょう。あるいはヤコブにヨセフが与えられたよ

うな、特別な思いです。しかも、獄中という制約された中で、オネシモが霊の誕生を経ました。

<sup>11</sup> 彼は、以前はあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても役に立つ者となっています。

これは、掛詞です。オネシモは、「役立つ」という意味なのです。彼は、ピレモンにとって窃盗して逃げたのですから、役に立たないのですが、今は、福音の働き人となっており、ピレモンにとっても、パウロにとっても役に立つ者です。

## 2B 福音の働き仲間 12-14

<sup>12</sup> そのオネシモをあなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。

オネシモも、テモテのようになっていました。パウロと同じ思いがあり、福音についても、信仰についても、同じ思いが与えられているということです。これは驚くべきことです。あの窃盗を働く奴隷、オネシモが、テモテと同じように有用な働き人となっているのです。

主は、このような驚くべき恵みのみわざを成されます。私たちが、いかに過去に囚われてしまうか分かりません。恵みによって、今の自分になったとパウロはコリント第一で言っていますが、迫害者が使徒となったのです。

<sup>13</sup> 私は、彼を私のもとにとどめておき、獄中にいる間、福音のためにあなたに代わって私に仕えてもらおうと思いました。<sup>14</sup> しかし、あなたの同意なしには何も行いたくありませんでした。それは、あなたの親切が強いられたものではなく、自発的なものとなるためです。

パウロは、鎖につながれているので、福音の働きをする時に物理的な制約が数多くあり、それで、自分の周囲に助けしてくれる人々が必要でした。それで、オネシモが必要だと感じているのです。ピレモンに代わって、と言っていますが、ピレモンにパウロのそばにいて仕えてほしいと思っているぐらいです。

けれども、オネシモには負い目があります。ピレモンの奴隷であって、逃げて来たという負い目です。ですから、ここでは赦しと和解という、福音の働きの必要を満たすための所要よりも、もっと大切なことがあります。それで、「あなたの同意なしには何も行いたくありませんでした」と言っています。手紙を送って、オネシモを私に仕えるようにしてもらいましたと伝えることはできるのですが、ピレモンの親切があつてこそ、愛と信頼において豊かになります。

「強いられたものではなく、自発的なもの」ということは、とても大切な教えです。律法においても、

数々のいけにえは、自ら進んでささげるものでありました。ただ、罪のきよめのいけにえや、代償のいけにえは、しなければいけないものでしたが、他は自発的なものだったのです。献げることは、自発的だからこそ意味のあるものです。献金についても、パウロはコリント第二で、「9:7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」とっています。

そして強いられておらず、自発的というところには、責任がともないます。強いられているのであれば、他の人のせいにはできません。けれども、自発的というところには、自らが自分の行動の結果に責任を持ちます。しかし、それだからこそ神のかたちとしての意義があります。神はご自身の自由意志で決めて、物事を行われます。同じように、神のかたちに造られた者も、自分の意志で決めて、それで意味を持つのです。

### 3B 愛する兄弟 15-16

<sup>15</sup> オネシモがしばらくの間あなたから離されたのは、おそらく、あなたが永久に彼を取り戻すためであったのでしよう。

オネシモはピレモンのところから離れて行きました。これは悪いことであり、オネシモはやってはいけないことでした。しかし、神はこのようなことをも用いられて、ご自分の栄光のための出来事としてくださいます。オネシモがピレモンのところから離れたことにより、彼がローマにまでやって来て、そしてローマでパウロと出会い、永遠のいのちを得ることができたのです。ピレモンからオネシモが離れてしまいましたが、もうこれからは、永久に離れることはありません。キリストにあって一つのからだに属しています。

旧約時代には、午前礼拝でお話ししましたように、ヨセフが兄たちに同じことを話しました。「創 50:20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。」兄たちがヨセフを売ったため、ヨセフはエジプトの奴隷となりました。この悪いことを神は用いられて、ヨセフをエジプトで第二の権力者とし、世界の飢饉のときにヤコブの家族を飢えから救うようにされたのです。

こうした、神の、すべてを相働かせて益としてくださるところのご計画を知って、それで神を愛する者たちは、神の赦しと和解を受け入れるようになるのです。「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」私たちキリスト者にとって、世界は善悪の二元論ではありません。悪は悪です。しかし、神は主権者であり、悪に対しても積極果敢に、ご自分の計画に中に入れて、善をもたらすようにされるという計らいをもっています。ここに希望があります。私たちは、いつまでも受けた悪を思い、恨む気力が失せるのです。赦して、神の慈しみを見ることができます。

<sup>16</sup> もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、愛する兄弟としてです。特に私にとって愛する兄弟ですが、あなたにとっては、肉においても主にあって、なおのことそうではありませんか。

ここに、福音のすばらしさがあります。パウロは使徒であり、権威が与えられています。ピレモンは、人間的にはオネシモに対して主人です。しかし、キリストにあっては、みな神によって生まれたのであり、神を父とする家族の中に入れられたのです。だから、互いに兄弟であり、ここには差別はないのです。実に、イエス様ご自身が弟子たちをご自身の兄弟とまで言われたのです。「ヨハ 20:17 わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

したがって、奴隷であっても主人であってもキリストにあって一つです。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」私たちは、いつも、自分たちの間に、いろいろな関係があるけれども、すべての者たちが、神を仰ぐ、神の子どもたちで、互いに兄弟であり、姉妹なのだという確信を保っていることが大切です。

そして、「あなたにとっては、肉においても主にあって、なおのことそうではありませんか」と言っています。肉において、というのは、奴隷というのはその人の家のものになっていますから、オネシモは、家族の一員だったのです。それで、主にあって兄弟だけでも、ピレモンの家にとっても、彼を兄弟として取り戻すことができますね、ということです。

### **3A 従順への確信 17-24**

ここまでお願いしましたが、次は彼を迎え入れてくださいという呼びかけになります。

#### **1B 代償の肩代わり 17-22**

<sup>17</sup> ですから、あなたが私を仲間の者だと思えば、私を迎えるようにオネシモを迎えてください。

パウロは、ピレモンにとって仲間かどうか？もちろん、仲間です。私たちは、キリストにあるつながりを持っている、愛と信頼によってつながれている者たちを仲間とします。新約聖書には数多く出てきます。そういう人たちとは、私たちは自分を「私たち」と呼び、自分と他者の区別をしません。私たちが、互いにそのような仲間意識を持っているかどうか、自問してみましょう。

そして、パウロを仲間だと思えば、オネシモもピレモンの仲間なのです。だから、迎えてくださいと言っています。受け入れることは、勇気がいることです。けれども、神がキリストにあって、まず私たちを受け入れてくださったことを忘れてはいけません。「ロマ 15:7 ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いな



い。」私たちを恵みによって受け入れてくださったのだから、私たちも互いに受け入れるのです。

<sup>18</sup> もし彼があなたに何か損害を与えたか、負債を負っているなら、その請求は私にしてください。

<sup>19</sup> 私パウロが自分の手で、「私が償います」と書いています。あなたが、あなた自身のことで私にもっと負債があることは、言わないことにします。

執り成しをする人が、本当に執り成しをしているかどうかの証しです。それは、身代わりの代償です。午前礼拝でも話しましたが、ヤコブの息子ユダは、ベニヤミンのために身代わりに奴隷になることを願い出しました。ここではパウロが、オネシモがもたらした損害、あるいは負債があるのであれば、パウロが償いますと言っています。手紙は、口頭筆記で、彼自身が書いていないのですが、けれどもここでは署名を記すかのように、「私が償います」と自分の手で書いているのです。イエス様が、私たちを償うために、対価としてご自身のいのちを差し出してくださいました。それと同じように、相手に執り成すために、その人の負い目を自ら負うのです。

ユダの執り成しにヨセフの心が動いたように、これでおそらく、ピレモンの心は動いたことでしょう。人の愛は、行いと真実の中に現れます。口で説得することは簡単です。けれども、自分自身が行いを見せることによって、初めて口で言っていることが真実であることを証しできます。「Ⅰヨハ3:17-18 この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」

そして興味深いことに、「あなたが、あなた自身のことで私にもっと負債があることは、言わないことにします。」と言っていますね。これは、パウロがピレモンを主に導いたことを指しています。もしこのことを話せば、ピレモンにいくらでも語る事ができてしまいます。イエス様が赦しを語られた時に、一万タラントの負債を持っている家来の喩えを語られましたね。王は彼の負債をかわいそうに思い帳消しにしましたが、百デナリの借金をしている仲間は赦しませんでした。一デナリは、一タラントの6000分の一の金額です。それでみな、あきれてしまい、悲しくなりました。王は、それで彼を、すべて返済するまで獄屋に入れました。

こうした、永遠の赦し、すべての負債の免除という福音を私たちは受けています。だからこそ、パウロがピレモンを信仰に導いたことを言ってしまったら、彼にはオネシモを赦す義務が生じます。けれども、そのことはピレモン自身が神の恵みを知っているのですから、その恵みに応じて、オネシモを迎え入れないといけないのです。

<sup>20</sup> そうです、兄弟よ。私は主にあって、あなたの厚意にあずかりたいのです。私をキリストにあって安心させてください。

パウロは、ここで自分が使徒であることを横に退け、兄弟よ、と呼びかけています。そして、主にあって、彼の厚意にあずかりたいとまで行っています。そして、ピレモンが多くの聖徒を、その愛によって安心させていたように、パウロも同じように安心したいと願っています。ピレモンのほうからの、自発的な赦しを待っているのです。

<sup>21</sup> 私はあなたの従順を確信して書いています。私が言う以上のことまで、あなたはしてくださると、分かっています。

ここには、パウロのピレモンに対する信頼が見えます。従順を確信していると言っていますが、それはパウロの命令に従順ということではなく、キリストの愛の律法に従順ということです。彼が愛の人であるならば、このことについても従順であると確信しているのです。さらに、パウロが言う以上のことをしてくれとまで言っています。

その後、どうなったのか？ 聖書には書かれていません。けれども、使徒教父と呼ばれる、使徒たちの弟子たちである、教会指導者の一人が、オネシモについて書き記しています。ヨハネの弟子であった、イグナティオスがいます。「イグナティオスの手紙 — エペソのキリスト者へ」に、こう書き記しています。「オネシモスは言い尽くせぬ愛の人、肉においてはあなた方の監督であり、私はあなたがたがイエス・キリストに従って彼を愛し、皆彼のようになることを、お祈りしております。<sup>1</sup>」すごい、賞賛ですね！

ピレモンがオネシモを迎え入れたから、こうなりました。パウロは、オネシモに、恵みによってそれだけの忠実さを見ていたのです。パウロが、回心する時に、テモテ第一 1 章によると、すでに忠実な者と認めておられました。働きをする時にすでにそのようにみなしておられたのです。神の恵みはこのようなものです。私たちが何の働きもしていないのに、あたかも成し遂げたようにみなすのです。なぜなら、神が予め良い行いも、用意しておられるからです。

<sup>22</sup> 同時に、私の宿も用意しておいてください。あなたがたの祈りによって、私はあなたがたのもとに行くことが許されると期待しているからです。

パウロは、釈放される確信がありました。それで、具体的に宿の用意、その家の中で寝られるようにお願いしますと言っています。そして、釈放されて、コロサイに行けるようになることを、ピレモンの家の教会はいつも祈っていました。それで期待しているのです。

私たちも、戸が開かれるように祈るいのりを、祈り会で献げています。主にあって、具体的に祈って行きましょう。

---

<sup>1</sup> 「使徒教父文書」八木誠一訳 講談社文芸文庫 158 頁

## 2B 挨拶 23-24

<sup>23</sup> キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っていません。

最後は、挨拶です。エパfrasは、コロサイで教会の働きをしていた人です。コロサイ書にこう書いています。「4:12 あなたがたの仲間の一人、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが神のみこころのすべてを確信し、成熟した者として堅く立つことができるように、あなたがたのために祈りに励んでいます。」このような人でありませんが、彼はローマに来たら、捕らえられてしまったようです。それで、パウロと共に囚人となっています。それにも拘らず、祈りに励んで、遠くから、コロサイの教会のために祈っているのです。

<sup>24</sup> 私の同労者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。

ここに書かれている名前も、コロサイ書に書いてあります。午前礼拝で話したように、マルコとは、マルコの福音書を書いたマルコで、第一次宣教旅行で途中で脱落した人です。マルコのために、バルナバとパウロは対立しました。パウロは、役に立たない者とみなしていましたが、神の恵みにより、彼を今は、非常に役に立つ人とみなしています。

アリストアルコも、コロサイ書によるとローマで囚人となっています。彼は、エペソの大劇場での騒動に、パウロの同行者ということで巻き込まれています(使徒 19:29)。そして、デマスはテモテ第二で学びましたが、残念なことに、パウロが二回目のローマでの投獄の時は、今の世を愛して、テサロニケに行ってしまった、とパウロは書き記しています。

そして、ルカです。オネシモと同じように、ルカも奴隷であったと考える人が多いです。ローマ社会には、二百万、三百万とも言われる奴隷がいて、人口の四割、三割とも言われていました。だれもが、奴隷を持っていました。私たちのイメージとは違い、ローマ社会にはいろいろな種類の奴隷がいて、農場や家の中の奴隷だけでなく、高度専門職もありました。教師、会計士、医師、秘書などは、大半が奴隷だったのです。そして、ギリシア人の奴隷には医者が多くいました。ルカもその一人ではないかと言われています。彼の主人が、ルカの福音書と使徒の働きの冒頭に出てくる、「テオフィロ」ではないか？と言われています。

<sup>25</sup> 主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

すばらしいですね、いつも主イエス・キリストの恵みによって終わります。オネシモの回心、ピレモンの受け入れ、そして、パウロたちに同行している者たちの姿、すべて主イエス・キリストの恵みです。私たちの行いにも、主の恵みの軌跡、足跡が見えますように祈ります。